

日本ボストン会会報

発行者 日本ボストン会事務局

日本・ニューイングランド交流の近況

ボストン日本人会会長 小久保 武

去る6月、日本へ帰国の際、東京では「日本ボストン会」の藤盛・土居ご両氏、また京都では「京都ボストン交流の会」の榊原会長・島田事務局長はじめ役員の皆様方の身に余るご歓待に与かり光栄に存じます。両団体とも、ボストン・ニューイングランドとの交流のために活発な活動を行っておられることを知り大変頼もしく思いました。こうした日本サイドの動きに対応するボストンの近況を、私の知る範囲内で以下に報告させて戴きます。

まず交流を担う団体ですが、これにはニューイングランド6州に一つずつ（但しコネチカット州には二つ）存在する「日本協会」を挙げることができると思います。この団体はアメリカ人を主体とする友好団体で、それぞれの地域でそれぞれ独立した活動を行っています。一番古いのが「ボストン日本協会」で、最も意欲的な活動を行っています。

「ボストン日本人会」はこれとは別で、在留邦人とその家族が主な会員です。小規模な日本人会は他地域にもありますが、ニューイングランドでは本会が最大で歴史も長く、戦前の「日本人留学生会」や実業人の「日の出倶楽部」等が母体になっています。

以上二種の団体のほか、日本の都市との提携関係を推進する市や町の委員会（といっても草の根レベルの住民グループ）も日米交流に携わる重要な団体です。ボストン（京都と提携）、アーリントン（長岡京）、メドフォード（延岡）マサチューセッツ州（北海道）など、在留邦人も多く参加しています。

現在、ボストン日本協会が3年後の100周年を目標に大きな計画を練っていますが、昨年来当地で話題になったのは、子供博物館で行われた姉妹都市40周年記念の京都の伝統文化工芸展、タフト大学ホールでメドフォードと提携20周年を祝って行われた延岡市交響楽団によるベートーベンの第九交響曲（合唱付）の大演奏会、そして10周年を記念し北海道マサチューセッツ協会が送った大訪問団による音楽会、講演会、展覧会等一連の多彩な催しでした。

こうした草の根交流とも関連し、総領事館の発案で数年前から行われている「ジャパン・イン・ボストン」が、春の行事として定着しつつある事はご同慶の至りです。当地の日米官民グループと日本の関連団体との一層緊密な連携を期したいと思います。

総会・懇親会のお知らせ (同封ちらし参照)

日時： 平成13年11月16日(金) 午後6時開場、午後6時半開会。

場所： NEC三田ハウス芝クラブ(JR田町駅、都営地下鉄三田駅下車)

港区芝5-21-7、☎03-5443-1400

出席者： 当日払い お一人 6000円/同伴者 5000円

事前送金 お一人 5000円/同伴者 5000円

送金方法：

申込み先： 日本ボストン会事務局 (同封葉書、又はE-mailにて10月31日までにお知らせ下さい)

観桜会(九段・千鳥が淵)

潤いのある日本のさくら

酒巻晴行・則子

13年ぶりに東京に戻ってきて、私たちが日本ボストン会のお花見に参加したのは4月8日(日曜日)の夕方でした。初めての参加だったので、どんな人たちに会えるのか、とても楽しみにしておりましたが、それにも増して楽しみにしていたのは日本の桜との再会でした。

集合場所は千鳥が淵のフェアモントホテル前。午後5時半をめぐるところ、メンバーの人たちと思える人たちが続々と集まってきて、たちまち和やかな語らいの集団となりました。

メンバーが揃ったところでいよいよ花見の散策開始。千鳥が淵に沿って桜の下を30分、ダイヤモンドホテルに向かって歩きます。桜前線が少々早かったようで、花はすでにピークを過ぎておりましたが、それでも花見の雰囲気は十分でした。地面に散った花びらと千鳥が淵の水面に浮く花びらが微妙にマッチして、春が待ちわびていた人々のこころを捉えます。春がまさしくそこに在って新しい季節の始まりを告げているようでした。ああ日本のお花見とはこのことだったと、久しぶりに味わう「季節の味」に自分がちょっぴりセンチメンタルになっていました。

日本の花見は季節の儀式だったのです。桜の花の下を通ることは一つのみそぎでした。花の下を通るだけで心が洗われ、古い季節への別れを感じ、新しい季節への出発と希望に夢を託します。そんなことを思い巡らしながら、改めて桜の花びらを見つめると、日本の桜がボストンで見た桜と違うことに気づいたのです。

写真を趣味にしてニューイングランドの花をカメラのレンズを通して見つめていた私にとって、桜は春に咲く花々の一つに過ぎませんでした。どこかドライで、特別鮮やかでもなく、いつも他の花に圧倒されていた花でした。

ところが日本で見る桜にはどこか潤いがあり、見る者の心を捉えて離さないのです。日本の人々が春を待ちわび、桜の満開を祝い、花の下で友と杯を交わすその意味が今やっとわかったような気がします。桜なしには日本には春が来ないのです。そして新しい出発もないのです。桜が日本のシンボルであったことを改めて知った日本ボストン会のお花見でした。

ボストン日本人会会報#104より(要旨)

第16回桜の植樹式開催

ボストン日本国総領事館は、マサチューセッツ州政府と共催で、州知事の臨席を得て1985年(昭和60年)以来、ボストンにおいて「桜の植樹式」を開催してきている。

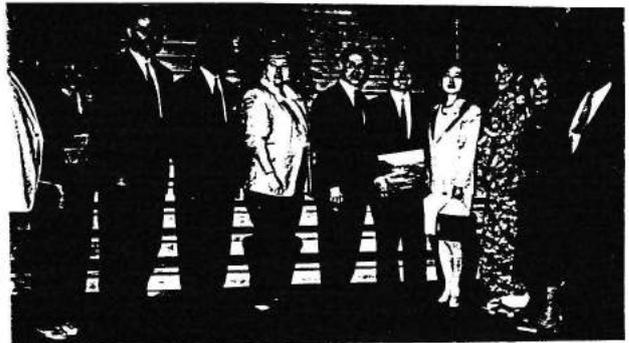
この「桜の植樹式」は、今年で第16回を数え、「ボストンの千本桜」として広く親しまれており、州議会議長、議員、ボストン市長、商工会議所会頭はじめ、ビジネス界の要路の方々、法人企業の代表者等が参加する当地では数少ない行事であり、歴史もあり、当地では州民が久しくその開催を待ち望んでいる春の一大行事で、州民の桜見物の様子はテレビはじめ新聞・ラジオでも大々的に報道されている。

現在まで約1,400本の桜の苗木がボストンのチャールズ川沿いの公園(Herter Park, Esplanade)やFederal Archive およびMedford、Chelsea 両市のミスチック川沿いの公園にも植樹された。今回はMelrose市の池のある公園に植樹される。

今年は、去る6月27日(水)正午から州議会議事堂(2階グランド・ホール)において、州下院議長を主賓として州両院議員および州政府・ボストン日本人会・ボストン日本協会関係者等、約100名が参加して開催された。

年に一度、日本とマサチューセッツ州の友好を象徴する行事で、現在まで長きに亘って続いている。今回は、式典後の恒例のレセプションに先立ち、アメリカ人と日本人による「琴の演奏」と「ジャズの演奏」による「さくら・さくら」の競演も用意された。

日本側から寄贈された桜は、マサチューセッツ州と日本の親善友好のシンボルとして、日米の文化交流および相互理解に大いに寄与している旨、州下院議長から感謝のお祝辞を頂戴した。



植樹式記念写真(右⇒左)(敬称略)

石井菊一郎 御木本アメリカ(株)社長(協賛)

石井夫人

キャサリン・アヤカノ・リード(琴奏者)

山本総領事夫人

山本忠通総領事

トーマス・フィネラン(「マ」州下院議長)

エリザベス・エームス(「マ」州経済開発局長)

ジョージ・ラッセル スター・ストリート(株)副社長(協賛)

ブライアン・ドノバン

フィデリティー投資顧問(株)副社長(協賛)

グラハム・智子(琴奏者)

デービッド・バルフォア

(「マ」州都市地域委員会委員長・司会)

ボストン日本人会婦人部

第2回里帰りの旅

吉野 静子

4月5日予定より数時間遅れて、無事日本橋のホテルに到着したのは夜も大部更けてからだった。別便で到着していたNさんと顔見知りのホテルの方々の暖かい出迎えを受け、私たちの里帰りを実感した。

翌6日、開店早々の三越ライオン前でOさんと落ち合った。ボストンと東京を行ったり来たりOさんが東京の案内役をかって出て下さったのだ。

夕方は早くも歌舞伎見物、座席は一等席、出し物は義経千本桜、お江戸みやげ、鶯娘、役者は吉右衛門、福助、富十郎など。里帰り組6人と日本組4人の計10人は旧交を暖め、観劇に大満足、心豊かな一夜であった。

8日は夕方からの日本ボストン会観桜会に参加させて戴き、桜吹雪の中を事前に会報の記事で私たちのことを知り、参加して下さいた多くの方々と散策できたこと、また、その後の懇親会にはボストンからの一行6人をご招待下さり、暖かくもてなして下さいたことなど、良い思い出と共に日本ボストン会との交流に改めて存在意義を感じて感激した。

10日から3日間、箱根姥子の会員制ホテルで心身共にリラックス。富士山を一望出来る女性露天風呂には夕方になるとなぜか樽酒が置かれた。(男性露天風呂には置かれられないという。) 升を温泉に浮かべながら味わう日本酒は正に温泉天国、今は日本にいるのだと実感した。

高齢になると、長時間の空の旅は不可能になるのだろうか。ドクターからストップが掛かり、今回参加出来なかった数人の方々の健康が回復したら、ぜひ又この温泉にご一緒したいと思った。

箱根に居る間、墓参を兼ねて桜の名所でもある富士霊園にお花見に行ってきた。四季折々の花木が植えられた富士の裾野の広大な敷地内の桜並木は見事な景観だった。

13日は小田原から新幹線で一路大阪に向かった。新大阪駅では友人2人の出迎えを受け、宿泊先の新阪急ホテルと芦屋の知人林宅との二手に別れた。

芦屋組みであった私たち3人には、見事に復興した芦屋の町と林家に3日間お世話になった。ボストン

ン在住のお嬢さんの友人というだけの縁で私たちを受入れて暖かくおもてなしをして下さった林ご夫妻に、改めて深く感謝している。

ここで、ちょっとNさんのエピソードをご紹介します。アメリカ人のご主人との結婚生活は50数年になり、一人で旅に出たのは今回が初めてとの事。一人で家に居るご主人が心配で毎晩決まった時間に電話をしていました。が、ある週末いくら電話をしても出ないご主人が倒れて電話を取れないのか、どうしたのかと、あらぬ心配をしましたが、間もなく留守電を聞いた娘さんからの連絡で、寂しそうなお父さんを食事に連れだしたことが判り、ハッピーエンドで一件落着。心暖まる素晴らしい夫婦愛、ほのぼのとした親子の愛を感じました。

15日は早朝からの吉野山桜見物。新大阪駅からJTBのバスでお弁当付きの一日観光、丁度ピークの時とあって道中は長蛇の列、目的地の吉野山の道も人人人、みやげ物屋も人だかりでいっぱい、桜見物どころかお弁当を広げる場所を探すのに四苦八苦、久しぶりに日本の観光地の混雑を味わった。

16日は日本滞在最後の日、宝塚大劇場で昼の部の"ベルサイユのばら"の華麗な舞台を心ゆくまで堪能し、夕食は関西でお世話になった方々との晚餐をととても珍しいお店"器の蔵茶房かわらや"で戴いた。

瓦屋が本業のご主人が趣味で始め、限定付きで一晩一組のお客をもてなすのを信条としているとの事。

こんな処にと思うほど鄙びた場所にあり、つくばいの水の流れる音しか聞こえない静かな日本庭園の眺めとお食事は、見事に調和した幽玄の世界のようであった。

最後の夜は全員新阪急ホテルに宿泊し、17日午前中最後の買い物をして、ホテルから一路関西空港へ、そして同夜無事にボストンに帰り着いた。

最後に今回の里帰り旅行にあたり、日本ボストン会の皆様にお世話になり、無事に旅を終えることが出来ましたことに厚く御礼を申し上げます。

美術の会報告(7月14-15日)

“名古屋ボストン美術館の旅”

三好 彰

7月14日(土)午後、名古屋ボストン美術館に18人が集合した。最初に浅野徹館長から「MFA(ボストン美術館)の収蔵品を20年間にわたり順次展示することを目的に1999年に開館した。5年毎に展示テーマを見直す常設展と、年2回の企画展がある」とのお話があった。

ついでハーバード大学で学ばれた井上学芸員から、現在の企画展である「紅茶と西洋陶器」について、「茶と磁器は中国の原産で17世紀に伝わった。磁器はデルフト(オランダ)など欧州各地で作られるようになり、現在も珍重されている。」とスライドを交えての解説を戴いた。

そしてかつてMFAに勤務され、現在当会会員である柴柳美佐さんから「MFAには肥前陶磁で未整理のものが多くあり、調査したところ逸品が多いことが分かった」と研究報告された。

講演の後、浅野館長と井上学芸員のご案内で企画展を鑑賞した。ボストン滞在中にMFAの会員になり30回以上見学したが、展示品の素晴らしさが理解できていないことを知って恥じいった。

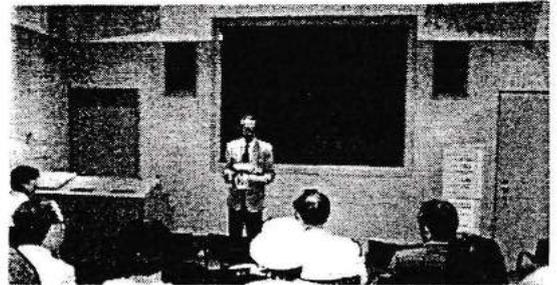
夕食は大正2年創業の料亭「蔦茂」で懐石料理に舌鼓を打った。そして芸処・名古屋の新内勝知与(しんない かつちよ) 師匠の熱演があった。

日本文化を高く評価したモースが日本の音楽だけは理解に苦しむと書き残していることと照らし合わせて聴いたが、歌詞に秘められた色事はとても理解できなかったことだろう。会食後、久米さんのお知り合いのクラブでクラシック音楽の歌唱に興じるという盛りたくさん一日であった。

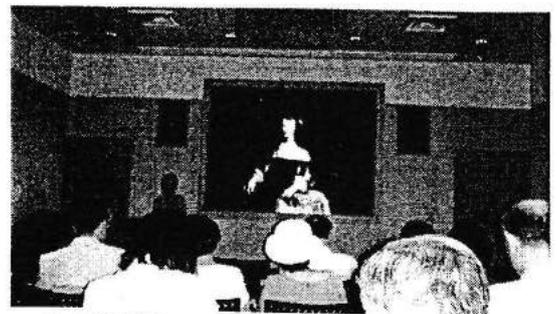
翌日は、内藤さんのご案内で市内を見学した。

名古屋は築城の際に町家を武家屋敷と城の間に配置した。戦災後の復旧で100メートル道路を作り、地下を多様に活用していること、そして市内の墓地を一箇所に集めて東山平和公園にした事など世界が今も注目する都市設計がなされていることを知った。

ボストンで都市計画といえば、10年計画が進められているBig Digがある。都心を走る高架のFreewayを地下に埋めるアメリカで最大の工事である。



浅野館長のお話

井上学芸員
企画展“紅茶とヨーロッパ陶器の流れ”

交通渋滞の緩和のみならず、跡地を公園にするなどボストンを一層素晴らしい町にしようとしているので完成(2004年の予定)後に訪問したいものだ。

さて自動織機、自動車、陶器、楽器などで名古屋から起業家が輩出しているが、関係者が住んだ町並みを見た。そしてボストン地区がシリコンバレーと並んだ起業家のメッカであり、ハイテク産業を生みつけていることに思いが及んだ。

ついでトヨタ産業技術記念館を訪問した。昼食後、間瀬祐士館長のご案内を戴き、ここでもローウエルの繊維歴史博物館を木綿工場博物館、それに大正時代に駐日アメリカ大使であったLarz Anderson氏が収集したクラシック・カーを展示した交通博物館(ブルックライン)を懐かしく思い出した。

見学の最後は、下水処理過程で発生する熱を利用した熱帯植物ランの館であった。

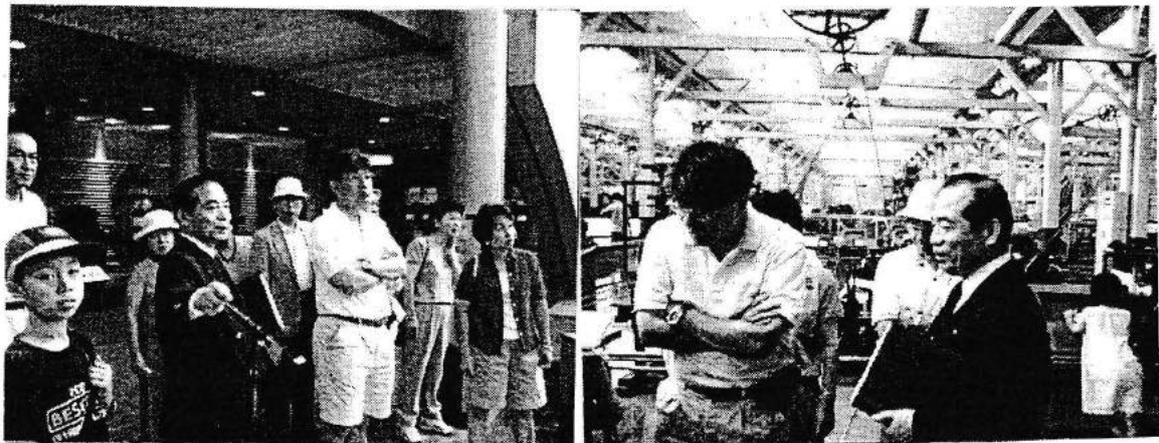
ボストンに熱帯植物園はないが、春先に毎年開かれているニューイングランド・フラワー・ショーの賑わいを懐かしく思う方も少なくないことだろう。

今回の見学会では、神代にさかのぼる家系という牛毛神社の久米生光禰宜、清水建設の内藤克己部長に大変お世話になった。文字通りの末筆であるが、両氏に深甚な感謝を申し上げる次第である。

懇親会は住吉町の料亭萬茂で



名古屋の芸所紹介は、
新内勝知与さんの熱演



2日目は名古屋市内の見学。まず名古屋の都市計画の説明を受けた後、
トヨタの産業技術記念館に向かいました。

間瀬館長 1時間半にわたってご案内くださいました。

ボストン美術館の肥前陶磁について

柴 柳 美 佐

1997年から1998年にかけて、私はボランティアとして、ボストン美術館の肥前陶磁の調査をすることができました。

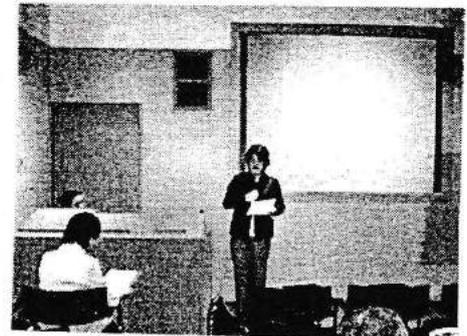
ボストン美術館の日本陶磁は、モースコレクションとそれ以外のコレクションの大きく二つに分けることができます。

モースコレクションとは、皆さんよくご存知のエドワード・モースが、日本全国から集めた五千点程の陶磁器のコレクションです。中には非常に美的価値の高いものもありますが、どちらかというと、標本的に集められた感があります。他の美術品とは別の部屋に、系統的に分類されています。

モースコレクション以外の陶磁器は他の美術品と同じ収蔵庫に保管されています。この内、古伊万里、鍋島焼、柿右衛門様式、古九谷様式の肥前陶磁 120点程を調査しました。これらの肥前陶磁のコレクションも、他のボストン美術館の美術品と同じように、寄贈品を中心として構成されています。肥前陶磁を寄贈した主なコレクターに、ビゲロウとオールドリッチがいます。

有名なビゲロウ、William S. Bigelow(1850~1926)、は1882年にモース、フェノロサと初めて来日しました。絵画、彫刻、刀装具、染色品、漆器等を集めました。特に数万点に及ぶ浮世絵の収集で知られています。陶磁器では鍋島焼を多く収集しました。早い時期の収集でもあり、広い視野と確かな目をもって集められたビゲロウのコレクションは、とても質の高いものです。ただ当時の梱包や輸送の問題から、一部破損したものが残念です。

オールドリッチ、Lucy T. Aldrich (1869~1955)、はロードアイランドの上院議員の娘でロックフェラー二世夫人の姉にあたります。彼女は1919年から30年の間、しばしば来日しました。日本に限らずアジアに度々出掛けて、中国で列車強盗にあたり、インドで蜂の大群に襲われたり、大変な経験もしています。



彼女は、日本とボストンの山中商会の仲介で、約1200点の服飾品や染色品等を収集しました。服飾、染色品のコレクションは、ロードアイランド・スクール・オブ・デザイン付属美術館に寄贈されています。ボストン美術館に寄贈された陶磁器では伊万里が特に多く、柿右衛門様式、鍋島焼等が続きます。オールドリッチのコレクションは、素晴らしいものが多いのですが、中には明らかに贋物と思われるものが混じっています。彼女が来日した時代に、既に贋物の流通が始まっていたためでしょう。

直接にボストン美術館に貢献したわけではないのですが、興味深い人物にプリンクリー、Francis Brinkley(1841~1912)、という英国人がいます。彼はもともと軍人として1867年来日し、後にジャパンメール社を経営、ロンドンタイムスの日本通信員等をつとめながら、様々に活躍をした人物です。彼のコレクションが、ボストン美術館にまとまってわたったという言い伝えもあり、或いはオールドリッチコレクションの一部は、プリンクリーから買い取ったものかもしれません。

私の前に、モースコレクション以外の日本陶磁を調査した研究者は、余りいなかったようです。そのため収蔵庫には殆ど展示されることもなく保管されている、驚くほどの名品が幾つもありました。学生時代に美術史を学び、陶磁器を研究していた私には調査は宝の山に入るような貴重な経験でした。

最終的に、とった調書をファイルに納め、日本陶磁の展示品のお手伝いをして、帰国することができました。ボランティアとしての私を快く受け入れてくださった学芸員のアン・モースさん、エミコ・ウスイさんはじめ、当時アジア部門におられた皆さんに心より感謝致しております。

美術愛好会

Union Square (N. Y.)

“14th Street” の画家達 II

Reginard Marsh(1895~1954)は慌ただしい日常生活から逃れた市井の人々の余暇を楽しむ一瞬をスケッチ風に捉えた。各時期で、作風は変化することなく、真っ直ぐな道を歩き続けた画家であった。

1930年には、Marshの作品はより円熟さを増してきていた。Subway Station, Fourteenth Street(1930)は忙しそうに通り過ぎる人々をよそに、一人新聞を読む男を置いて、左右に動く人々でバランスをとっている。右から左へ、そして上から下への振動が伝わって来る様である。荒々しい筆触によって一気に描かれ、明色と暗色の対比感も激しい。

BMT, Fourteenth Street(1932)は買い物客で賑わうBMTを描いている。各人、夫々、勝手な方向を見つめている。

Bishop、そして CitronもMarshの画風、題材に影響されるが、Marshの描く人物より描かれた人物への思い入れが感じられ、観る人の魂をゆさぶられる、微妙な心の動きを追うかの様に顔の表現、仕事に注意力を集中させている。

しかし、Marshの作品からはユーモアが伝わってきて、思わず顔の筋肉がほころびぶ、そんなチャーミングな作品である。

3人の画家に共通してみられる古き良き時代のファッションの表現は、自由なタッチで生き生きと描かれている。

New Yorkの新聞、そして月刊雑誌のイラストレーターとして働いていて、しばしば締め切りギリギリまで描いていたせいか、独立してからも非常に早いスピードでエネルギーに描き続けたMarshであった。

一般大衆との連帯は終始念頭から去らず、Bishop、そして Citron同様、New Yorkをこよなく愛し続けた画家であった。(続く)



Reginald Marsh, Subway Station, Fourteenth Street(1930)



Reginald Marsh, BMT, Fourteenth Street(1932)

酒井典子

ゴルフの会報告

優勝の弁

當間 秀雄

フリーになって一年、気楽なゴルフに成果を出せた様です。10kgの減量が、なんといっても、一番効いたのでしょう。

昨年帰国後の検診で血糖値 248と悪化、再検査の結果、“運動と食事療法で減量すれば、今なら未だ間に合う”との診断で始めた減量作戦の成果でした。

帰国後、カンガルーのいる広大な原野のコースで、ひたすら距離を稼ぐというオーストラリア仕込みのゴルフは、日本の環境に合わず、苦戦の連続でした。“ただただひっぱたく”のではなく、“じっと我慢で3打目勝負が肝要”というのが、ちょっと判ってきた様です。今後もこれを念頭に頑張ろうというのが、今の心境です。

皆様、今後とも、よろしく。

最後に、私事ですが、これで先に優勝したかみさん(きよみ)に追いつき、亭主の意地を示すことが出来、やれやれです。

記録は以下です。

2001年度第1回ゴルフ懇親会は、4月19日(木) 泉カントリー倶楽部において開催しました。17名のご参加があり、結果は次の通りでした。

當間秀雄(優勝)	荒金豊(2位)
伊藤道生(3位)	山崎恒(4位)
吉川道也(5位)	山崎規矩子(6位)
松澤美智子(7位)	茂木賢三郎(8位)
近藤宣之(9位)	糟谷光彦(10位)
太田隆義(11位)	松澤宏親(12位)
幸野眞士(13位)	當間きよみ(14位)
藤盛富美子(BB)	吉田久夫(16位)
藤盛紀明(途中棄権)	

本年第2回懇親ゴルフ会は次の予定です。

10月18日(木)
泉カントリー倶楽部
申込み先 近藤宣之

申込み締切り 9月末

幹事会報告

2001年6月19日(火) 出席者(16名)

* 前回議事録確認(藤盛)

* 事務局報告(土居)

i 新入会員(お花見を切掛で入会、6家族)

酒巻晴行・則子、鹿庭政人・桂子、筒井健作・弥生、三好彰・美智子、太田隆義・敏江、今川明夫・祐子。

(その後入会、2家族) 糟谷光彦、内山幹子。

ii マサチューセッツ港湾局東京事務所からガイドブック送付の依頼があった。贈呈することを承認。(俣野、先方に持参)。

* 新規メンバー勧誘について(佐々木)

MIT名簿発送時に当会のことを紹介したい。

* 歴史の会報告(篠崎)

北海道旅行(10月6-7日) 計画中。

札幌の北海道マサチューセッツ協会とも打合せ中。

(後記 来年7月頃に延期を決定)。

* 音楽の会(佐々木) C&Cは現在休止中。

* ゴルフの会(別項参照)

4月19日(木)のコンペは當間秀雄氏が優勝。

次回10月18日於泉カントリー倶楽部。

* 美術の会報告(酒井)(別項参照)

名古屋ボストン美術館7月14日訪問、展示品を

観賞。浅野徹館長の特別講話、会員柴柳美佐さん

同行を予定。翌15日、名古屋市内見物予定。

* お花見の会報告(藤盛)(別項参照)

ボストン「いこいの場」の里帰りの方の参加もあり

盛会であった。次回は02年4月7日(日)

* ハイキングの会(土居)

11月に青葉台・柿生を歩く計画(後記参照)

* ボストン日本人会報告(土居)

小久保武会長が来日された。(別項参照)

今年のホーム・ステイは中止。

* ボストン・ガイドブック頒布状況報告。残4冊。

* 会報発行、原稿締切り8月末、10月初め発行。

2001年9月21日(金) 出席者(19名)

* 総会開催準備(11月16日金曜日)(ヲリ 参照)

* 会報発行、原稿締切り2月末、3月中旬発行。

* 歴史とハイキングの会(篠崎)

12月2日午後、本郷・湯島文学散歩、あと夕食

会兼幹事会(於天庄湯島店)(チラシ参照)

* 次々回幹事会2月中旬予定。